The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 徳富蘇峰とE・L・ゴッドキン ： 『国民之友』の成立とThe Nation |
| Author(s) | カルモナ, ダニエル ウイリアム |
| Citation | 大阪大学, 2008, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/49467 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【２】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | CARMONA, DANIEL WILLIAM（カルモナ　ダニエル　ウイリアム） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（日本語・日本文化） |
| 学　位　記　番　号 | 第　２２５２４　号 |
| 学位授与年月日 | 平成20年９月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当<br>言語社会研究科言語社会専攻 |
| 学　位　論　文　名 | **徳富蘇峰とE・L・ゴッドキンー『国民之友』の成立と*The Nation*ー** |
| 論　文　審　査　委　員 | （主査）<br>教　授　嶋本　隆光<br>（副査）<br>教　授　森藤　一史　　教　授　奥西　峻介　　教　授　尾上新太郎<br>准教授　加藤　　均 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

徳富蘇峰（1863-1957）は近代日本の形成に影響を及ぼした、多作のジャーナリストであった。政治家でこそなかったが、政治、特に国際社会における日本の政治的位置について大いに関心を示し、ジャーナリズムという媒体を通じて、間接的に日本の政治に影響を及ぼした。執筆活動への偏執的ともいえる熱意と、日本の政治や将来に対する展望への積極的な関心によって、明治時代、蘇峰は日本の改革と西洋化の旗手として世論の最前線に立った。

これまで数々の徳富蘇峰研究がなされてきたが、その中で謎ともいえるのが蘇峰とアメリカの関係である。特に民友社の設立ならびに『国民之友』出版前後におけるアメリカとの関係はほとんど研究されていないのが現状である。当時のアメリカは民主主義がまさに広汎に受け容れられ始めた頃であって、多感な時期の蘇峰はアメリカに注目していた。そして蘇峰と、現在進行形で変化を続けるアメリカを繋いだ一つの雑誌が存在した。*The Nation*である。

蘇峰本人の記述にもあるように、アメリカ人教師ラーネッド（Dwight W. Learned）が自分の読んでいた*The Nation* を学生時代の蘇峰にも読ませてやったことは一つの大きな契機となった。その後1882年に蘇峰は地元、熊本で大江義塾を開校する。この頃（1882－1886年）も、蘇峰は*The Nation*を購読していたようである。蘇峰が*The Nation*を読み続けていた頃、E・L・ゴッドキン（Edwin Lawrence Godkin）という人物が同誌の編集長を務めていた。

この週刊誌*The Nation* については、他の研究者も随所で触れてはいるのだが、*The Nation* の発行者であるE・L・ゴッドキンに注目した研究者はおらず、今まで十分に研究されてこなかった。*The Nation*の記事には執筆者名が記されていなかったことも手伝い、これまで彼の存在、蘇峰に与えた影響の大きさは見過ごされてきた。さらに、蘇峰の思想形成や彼の著作における影響は不明であった。そこで、蘇峰がE・L・ゴッドキンに受けた影響を検証するということが、本論の出発点となった。

この二人の視点、共通する思想などを通して、筆者は『国民之友』創刊期の蘇峰と、*The Nation*を通じて蘇峰が見たアメリカとゴッドキンとの関わりを調査することとした。

調査を進めるうちに、筆者は、蘇峰がゴッドキンに宛てた手紙を発見した。憧れのゴッドキンに手紙を送り、蘇峰はゴッドキンにアプローチした。それによって、ゴッドキンは蘇峰と『国民之友』を意識し始め、やがて*The Nation* の中に蘇峰が出版した雑誌に関することや、日本の関連記事を載せるようになった。

この手紙の内容が正しければ、蘇峰はすべてのゴッドキンの社説などに目を通していたことになる。したがって、1880年代に蘇峰のエネルギーのおそらく大半を費やしたであろう雑誌の出版と彼自身の思想形成において*The Nation* が与えた影響が計り知れないことは十分に推測できる。

この事実を基にし、1885年から1900年の間、蘇峰の思想がより発展し、形を成し始めた期間について、『国民之友』と*The Nation* を検証した。ゴッドキンの社説や記事と、蘇峰自身の社説ならびに論評を比較検討することで、両者の民主主義（平民主義）への希望、貴族に対する軽蔑といった具体的な事例を通じて類似点が明らかになった。これによって、これまであまり明らかにされなかった蘇峰の情報源や思想形成の一端が明白になった。

調査を進めるうちに、ゴッドキンの最良の理解者であり、腹心ともいえるノートン（C・E・Norton）と蘇峰との親密な関係も明らかになった。両者関係が持続していることを考慮すると、これまでその重要性がしばしば指摘されてはいたが実証されてこなかった蘇峰のアメリカコネクションを一層確実なものとして理解できる。

蘇峰が同志社時代から読み始め、大江義塾を通してずっと読み続けた*The Nation* には、蘇峰の理想とする平民主義思想にぴったりと当てはまる、ゴッドキンの民主主義についての考え方があった。蘇峰が*The Nation* を情報源にして、『国民之友』の創刊期に、（当時のアメリカでまさに起こっている）民主主義について継続的に情報を得続け、これを咀嚼しながら蘇峰自身の持論を発展させていったのではないだろうか。

蘇峰が*The Nation* を読んでいたという事実を論考の出発点として、両誌『国民之友』と*The Nation* のいくつかの記事や、同時期に彼の思想が端的に表明された『将来之日本』の中に盛られた考えも参照しつつ、そこに見られるゴッドキンの思想との比較を行う作業によって、本論文では、若かりし蘇峰の思想形成に与えたアメリカの偉大なる雑誌の編集者の影響について、これまでの研究には見られなかった多大な影響を証明した。

## 論文審査の結果の要旨

本博士論文は、従来の徳富蘇峰研究のいわば盲点とも言うべき彼の初期思想形成におけるアメリカ合衆国との関係について新事実を紹介し、この事実をふまえた上で、蘇峰とThe Nation誌の創設者E.L.ゴッドキンの関係を『国民之友』ならびにThe Nation誌の詳細な比較検討を通じて、明らかにしようとした。

これまで、主に日本人研究者の間では、蘇峰のアメリカ合衆国ジャーナリズムとの関係並びにその影響について指摘されてきた。蘇峰が生涯を通じて示したアメリカに対する関心を考慮すれば、けだし当然である。たとえば、蘇峰自身、『国民之友』創刊に際してThe Nation誌から受けた恩恵や、同誌をすべて読んだ旨を自伝や自らの著作にたびたび記しており、彼がアメリカ合衆国のジャーナリズムから多大な影響を受けてきたことは、十分に推定できる。しかし、決定的な物証を欠くために、蘇峰の初期の思想形成におけるアメリカ合衆国ジャーナリズムの影響については殆ど論じられる事がなかった。不思議なことに、蘇峰は自らアメリカ旅行をしてからも（1897）、そのときの詳しい状況を公にしていない。記録が未発見なのか、不明である。この手詰まりの状況を打開する一つの方法は、1880年代から1900年頃までに蘇峰が広汎に参照した雑誌、新聞などを具に検討することである。この意味で、上記The Nation誌の検討は一つの有力な方法である。膨大な量の情報の処理と平行して決定的に重要な問題は、はたして蘇峰は本人が述べるようにThe Nationをくまなく読んでいたのか、さらに創設者のゴッドキンを初めとするThe Nation 誌の関係者との具体的な接点はあったのか、この点が明らかにされないと、雑誌そのものの検討はほぼ意味をなさなくなる。

Carmona氏は、この点を明らかにするための調査の過程で、1893年7月４日に蘇峰がゴッドキンに当てた手紙を探し当てた。この中で、蘇峰は自身を『国民之友』の編集者と紹介し、これまでThe Nation誌をすべて読破したこと、自らの雑誌の日本における役割をアメリカにおけるThe Nation誌に比し、さらに自ら発行する刊行物の宣伝まで依頼している。ゴッドキンから返答があったのか、現在の所不明であるが、1896年2月以降、たびたび『国民之友』の英語版The Far East誌がThe Nation誌上で紹介されるようになった。これと平行して、ゴッドキンの後継者であり腹心でもあるC.E. ノートンとの私的な関係を示す葉書などの文書も発見された。これらの資料は、蘇峰とThe Nation誌の実体的な関係を示す決定的な物証であり、これまでいずれの研究者も明らかにしてこなかった事実である。

Carmona氏は、このようにして発見された新事実に基づき、具体的にゴッドキンの筆になる社説、時事評論などあらゆる記事を精査し、これを蘇峰自身の記事や『将来之日本』など初期の作品と比較検討することによって、両者に共通する見解をある程度明らかにすることができた。

本博士論文は、先行研究にはなかった新事実を明らかにした点で画期的な業績である。さらに、新事実をふまえながら膨大な量の資料を精査して、蘇峰の初期の思想形成に与えたアメリカジャーナリズムの影響を、The Nation 誌の創設者ゴッドキンを通じてある程度明らかにできた点で、論文審査担当者は全員一致して、日本語・日本文化の博士号にふさわしいと判断した。